
隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第162号

-環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2005.07.07 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm

*****発行部数 1386 部*****

□■□

7月9日(土) 山崎農業研究所第30回山崎記念農業賞贈呈式・
記念フォーラム開催のお知らせ

□■□

◇第30回山崎記念農業賞贈呈式(13:45~14:30)

表彰対象: 埼玉県上尾市・榎本牧場

<http://www.os.rim.or.jp/~enomoto/>

都市近郊で草地と結びつけた酪農を実現、家族が協力して酪農体験
アイスクリーム加工を行い、お客さんと共に酪農の新しいあり方を求
めています。

◇記念フォーラム(14:40~17:00)

「牛の健康、人の健康 ― 榎本牧場に学ぶ」

- ・ ・ 健康な大地、健康な草、健康な牛・ ・
- ・ ・ 健康な家族、健康な食べもの、健康なお客さん・ ・
- ・ ・ ここに本来の農業を読む・ ・

「みんなが支えあう牧場を目指して」 榎本牧場 榎本 求氏

「榎本牧場に本来の酪農を読む」 元全農技術主幹 小川政則氏

「榎本牧場の家族パートナーシップ」 研究所会員 小井川敏子氏

「いのちと向き合った牧場の暮し」

写真家・写真絵本作家 星川治雄・ひろ子夫妻

*写真絵本「ぼくじょうにきてね」 読み聞かせ

ポプラ社編集部 仲地ゆい氏

「酪農体験で学んだもの」 杉並区立和田中学校2年

意見交換

▽日時：2005年7月9日（土）13：45～17：00

▽場所：太陽コンサルタンツ（株）3F会議室

（新宿区四谷3-5不動産会館、丸の内線四谷3丁目駅下車3分）

▽問い合わせ先：新宿区四谷3-5 不動産ビル

（事務局）tel 03-3357-5916 fax 3357-6398（小泉、益永）

*****会員以外の方の参加も歓迎します。*****

□ 目次 □-----

<今週の提言> 主体的に判断すること 熊澤喜久雄

<読者の声> 大山さんから

<旬を食べる一野良からの便り・25> “青梅” 小泉浩郎

<戦後60年の原点> サイパン慰霊の日--7月7日 原田 勉

<日本たまご事情>

鳥インフルエンザH5N2確定 水海道市 茨城県 齋藤富士雄

<玉川上水の謎> その3 上水と地形 安富六郎

<80才からのメッセージ>

大空襲を忘れない。一戦時体験（その4） 原田 勉

<農文協図書目録2005（全集出版案内 付）無料進呈>

<編集部からお知らせ> 『電子耕』まぐまぐバックナンバーのご紹介

<編集後記> 両手をあげるとのこと

<今週の提言> 主体的に判断すること

「だます心 だまされる心」という本（岩波新書）が出版され、好評のようであるが、昨今のいろいろの出来事を見ていると、だまされているのではないかと心配になる。

口では巧いことを言って、実際には弱肉強食を露骨に押し進めている。世界平和のためと言いながら海外派兵をし、それが石油などの利権争いに乗り遅れないためだと分かっても、そのうち日本の為だと居直り、生命線を守るためと恒常化し、拡大をする。やがて派兵相手国からも撤退を求められ、ぐずぐずしている間に侵略国に転化するかもしれない。過去の歴史認識とそれに対する反省がないのか、無視する施政者の姿勢は、ついには憲法9条を廃棄して堂々と海外への軍事的圧力を与えることを可能にしようとしている。君が代の押しつ

けに始まり、自由に考え行動することを制限しつつ、教育基本法の改正まで日程に上ってきた。

食料自給率の向上も目標数字は提示しても、その実現は国民の食生活の改善などを含む多くの希望的条件の達成に預けられている状況では、口先だけということになりかねない。前回の基本計画の見込みを多少なりとも達成した小麦や大豆は、個別的自給率は極めて低い水準に留まっているにもかかわらず、新計画では面積増加は目標から外されるか、非常に低い水準が示されているに過ぎない。財政的負担の増加という理由が仄めかされている。その上、品質が悪いという食品産業の要求を消費者の要求かのように描いている。こうして既に麦類の作付面積は再び減少傾向を示している。

食料自給率向上、とくに飼料自給率の向上のために重要な飼料米生産については、大面積の休耕田があるにも拘わらず、いまだに消極的か否定的である。財政負担とは別にトウモロコシの輸入と拮抗するようなことは、アメリカが許す筈がないということへの配慮からではなかろうか。このような状況の中で、地域からの運動として起こり、本年の3月に特区として認定された山形県遊佐町の飼料米生産、豚配合飼料生産の動きを見守りたい。

言葉ではなく実行で、希望的数値ではなく実際の数字で、空想的ではなく科学的に、識者へのお任せではなく、自分の頭で考え動くことが益々重要になってきている。

熊澤 喜久雄
山崎農研会員・東京大学名誉教授
y.nouken@taiyo-c.co.jp

<読者の声>

●06/25 大山勝夫さんから；80歳からのメツセージを読んで

前号に掲載された原田氏の戦時体験興味深く拝見。

東京初空襲のことが鮮明によみがえった。当時、国民学校5年だった僕は京浜工業地帯のど真ん中、川崎で遭遇。確かその日は土曜だったので半日で下校。

昼食の直前、警戒警報と同時に爆音響く。あわてて雨戸を閉めようとした瞬間、超低空で北方向に飛ぶ B25 を見た。

爆弾や高射砲の炸裂音に怯え、母とともに押入れに飛び込んだことを思い出した。

当時は軍国少年であった僕も、人には言えないが行く末に漠然とした不安感をもったことも事実である。敗戦後 60 年、80 歳から次世代へのメッセージは貴重である。ぜひとも続投を。

<旬を食べる―野良からの便り・25> “青梅”

梅雨時の旬のものは、字が示すとおり青梅だろう。日曜日、屋敷内の梅落しにやっと重い腰を上げた。熟した梅は、3割近く自然落下していた。直接硬い地面に落ちると傷がつき変色してしまう。1個ずつ手でもぎ取れば良いが、放任してきた樹は、3〜4mの高さである。ビニールシートを下に敷き、物干し竿で叩き落とした。半分の実が割れ傷ついた。2時間ほどでダンボール2杯ほどになった。

この屋敷の梅樹は、60年前から太さはほとんど変わっていない。毎年、春を告げ、実を結び、葉を落として冬を耐える。花が下を向いて咲く年は、晩霜が来るといわれる。

子供の頃、この梅樹も格好な遊び場であった。柿の木は素足で登れたが、梅は皮膚が粗く苦勞した。落ちた若い実を、1mほどの細い篠の先に挿し、大きくしならせて遠くへ飛ばす競争をした。梅の種子が硬くなるのを待って、おやつにした。親からは、青酸毒があるといって強く止められていた。親の目を隠れて、すっぱい実をそのまま、あるいは塩をつけて口にした。食べることには、知恵が出る。どこからか炭酸を見つけ出し、これをつけて食べるとすっぱみはぐーんと減った。生で食べるならあんずが美味しい。あんずの木がどこにあるかみな知っていた。

梅干作りは、祖母の仕事だった。紫蘇の葉で赤く色つけられた梅干が、土用の陽光に照らされている時、これにもそっと手を出し、よく叱られた。いたずらをする、叱られる、さらに悪知恵を出す。学校の成績は良くないが、知恵と行動力のあるガキ大将がいた。

テレビを見ていたら、阿久 悠がうまい事を言っていた。かつては、成績は悪いが知恵がある、金儲けは下手だが誠実だ、喧嘩早いが根は優しい。そんな人間がたくさんいたが、下の句が立派な人間がいなくなったというのだ。そのとおりだ。金儲けがうまく大金持ちだが……、成績がよく高級官僚になったが……。成績やお金など、数えられない下の句での自分のありようを振り返ってみるのも良いかもしれない。

小泉 浩郎
山崎農業研究所事務局長
y.nouken@taiyo-c.co.jp

<戦後 60 年の原点> サイパン慰霊の日--7 月 7 日

米軍の本格的反攻は 1942 年、昭和 17 年 8 月、ソロモン諸島のガダルカナルから始まった。

<ガダルカナル戦：参考リンク>

<http://www2.gizo.net/solomon/index2.html>

<http://www.aiben.jp/page/library/kaihou/4205guadalcanal.html>

<http://www.kaho.biz/main/taisen/guadalcanal.html>

<http://www.ne.jp/asahi/gaisui/iori/battle/battle6.html>

日本は絶対国防圏として、マリアナ諸島を死守するため、満州の関東軍をサイパンへ派遣した。

米軍は 71000 人の兵力で、1944 年、昭和 19 年 6 月 15 日上陸を開始した。迎え撃つ日本軍は、45000 人。地上戦 3 週間余り、島北部に追いつめられ、7 月 7 日。最後のバンザイ総突撃で玉砕した。

沖縄出身・朝鮮半島出身の民間人約 12000 人も、突撃に加わり、犠牲になった。

逃げ遅れた女性たちも含め、海に身を投げて集団自殺して、半数以上が亡くなった。現地の住民 933 人も犠牲になった。米軍は約 3500 人が戦死した。

サイパン島は米軍の B29 爆撃機の戦略基地となり、大都市戦略爆撃の拠点となり、さらに広島・長崎原爆搭載機が飛び立つ基地となった。

日本の敗戦を決定づけたのがサイパン戦だった。改めて 61 年目に、慰霊の黙祷を捧げる。

天皇、皇后両陛下のサイパン慰霊の旅は、6 月 27～28 日の両日行われた。元日本への戦友会や遺族会のメンバーから戦闘当時の話を聞き、日米最後の激戦地となった北部地域にある中部太平洋戦没者の碑を訪れ、自殺の崖「シューサイド・クリフ」や「天皇陛下万歳」を叫んで身投げした「バンザイ・クリフ」で黙礼された。

当初予定になかった、当時の在留邦人の 6 割を占めた沖縄出身者の「おきなわの塔」と韓国出身者の「韓国平和祈念塔」でも黙礼した。

また、アメリカ慰霊公園内のチャモロ人ら死亡した住民 933 人の名を刻んだ「マリアナ記念碑」と米軍の「第 2 次世界大戦慰霊碑」に花輪をささげた。

天皇、皇后両陛下の慰霊の旅は、適当味方の区別なく、兵士と市民を分けることなく、多くの人々に会い、死者への鎮魂の思いがあった。

同時に、昭和天皇が果たさなかった悔恨の面もあったに違いない。

なぜ、当時のサイパン民衆は、生き残ろうとしなかったのか、分かりますか？

★是非、読んで欲しいページ

松山大学法文学部田村譲教授のホームページ

<http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~tamura/>

の

☆サイパン/バンザイクリフ☆

<http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~tamura/saipann.htm>

<参考資料>

毎日新聞、2005 年 6 月 28 日朝刊、同夕刊「両陛下サイパン慰霊の旅」

MSN-Mainichi INTERACTIVE 皇室

<http://www.mainichi-msn.co.jp/shakai/koushitsu/>

原稿：山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田 勉

<http://nazuna.com/tom/>

リンク挿入：原田太郎

<日本たまご事情> 鳥インフルエンザH5N2確定 水海道市 茨城県

6/26 残念ながら関東地方の養鶏地帯のど真ん中茨城県水海道市のA養鶏場で鳥インフルエンザH5N2が確定した。昨年一月京都府での鳥インフルエンザの発生のこともあり、ついに来るものが来たと関東地方の養鶏家に衝撃が走った。首都圏は最大の鶏卵生産地であり、なかでも茨城県は全国一である。その影響力は京都府の比ではない。

今日現在判っている事は、茨城県の場合は同じ鳥インフルエンザであっても病勢がとても弱く、京都府の場合のように鶏を大量死させるものではない。人間に対しても感染はなく鶏に対しても感染力は弱いとされる。それ故、発生元とされるA養鶏場の自主的な検査機関への検査依頼がなければこの病気は未だに見つかっていなかった筈である。鶏の死亡率の多少の変化、及び産卵率の異常などは、鶏卵の生産現場では鳥インフルエンザならずともしょっちゅう起きることである。その点でA養鶏場のとった真面目な態度は評価される。

しかし法律とは怖いもので、真面目に自主検査を申し出たものが検査に引っかかった場合、自分の鶏が全部法律によって殺処分されてしまうのが現実である。勿論、それに対する補償はあるが、受けたダメージを補うにはあまりにも少ない。

幸い今回、消費者の皆さんはきわめて冷静で、いわゆる風評被害は起きていない。昨年の京都府での経験が生かされて行政機関による対応も迅速で、感染の拡大も最小限に食い止められている。

齋藤 富士雄

(株)愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp/>

<玉川上水の謎> その3 上水と地形

多摩川の東に開ける武蔵野は幾つかの台地に分かれて都心方向に延びている。台地にある立川、国分寺、田無、小金井、三鷹などは広大な水不足地帯にあった。台地に水をのせ、しかも広い範囲に分水させるには、さまざまな地形変化にも応じられる水路選択がよい。

玉川上水開発以前の上水は東進する自然の河川の利用である。谷津や低地を縫って流れる川から高台に水を引くことは難しい。しかし玉川上水は、誇張すれば峰に走らせた水路であるから、台地の広い範囲に給水ができる。これが上水が河川と基本的に異なる点である。

台地の選択は水利用の容易さ、遠隔地への良質な水供給の鍵となる。このためには、武蔵野台地の分布、形状、標高、河川などの地勢の正確な情報は欠かさない。この計画のための全体地形像がどの程度把握されていたのだろう。

玉川上水は江戸への生活用水供給が主目的であったが、多くの農村に分水(33分水)できたのは地形の有利さにあった。分水によって目黒、世田谷、埼玉県南を含む大きな水利網が形成された。立川砂川から分岐する野火止用水(1655)がある。この用水によって樹木も繁り新座、志木地域では農家の生産は飛躍的に増大し、3倍の収穫を得たといわれている。

また玉川上水の武蔵野市関前境橋で分水される千川用水(1696)は北区王子まで通水され、荒川流域に入る。用水は練馬、豊島、巣鴨などの地域を発展させた。

武蔵野台地を広く覆う水利網が都市、農村のみならず自然環境をも豊かにしたことを見るとき、上水がいかにも綿密な計画に基づいたものであるかを感じさせる。あたかも将来の地域開発計画を意識して作られたような水路なのである。

安富 六郎

山崎農研会員・電子耕編集同人

y.nouken@taiyo-c.co.jp

<80才からのメッセージ> 大空襲を忘れない。――戦時体験（その4）

3, 東京大空襲と叔父の家焼失（3月10日前後・本郷区（現在の文京区）動坂を中心に記録）

私は、軍隊に召集されたが、親戚の留守宅はどうなったか。

その前にまず、東京大空襲とはどういうものだったか再確認したい。当時は知ろうとしても詳しく分からなかった。

昭和20年1月27日、東片町、丸山新町、指ヶ谷町に爆弾。1月28日千駄木地区に焼夷弾。3月4日駒込地区は焼夷弾爆撃で焼失した。

3月9日夜から3月10日にかけて東京大空襲。

東部地区深川、城東、本所、江東、浅草、日本橋、麴町など下町全域全滅。

本郷区は半分が焦土になる被害を受けた。B29、235機、焼失家屋26万戸、死者10万人、被害者100万人。

続いて3月15日、340機、西部地区大森、品川などに焼夷弾。4月13・14日、330機、赤羽兵器廠を中心に豊島、王子、荒川、小石川、四谷、牛込など爆弾・焼夷弾。22万戸焼失したが、死者3300人、死者が少なかったのは消火活動を止めて全員避難するようになったからだ。

5月23日夜、千駄木地区に焼夷弾爆撃。（このとき叔父の石渉家全部焼失。）
5月24・25日、最期の東京大空襲。大森、品川、渋谷、世田谷、杉並、小石川など山手中心に470機と562機で波状攻撃、爆弾・焼夷弾3645トン。焼失家屋34487戸、被害人口23万8376人、死者762人、負傷者4130人。

こうして東京は一面の焼け野原となった。

4, 東京大空襲の焼け野原に立った印象

1945（昭和20）年、私こと陸軍幹部候補生原田勉は、7月24日松山から船・汽車で高松、宇野、岡山を経て神戸、大阪、名古屋など大都市の焼け跡に驚きながら、その空襲の被害を想像していた。やがて軍用列車の中に松山市も7月27日に大空襲を受けた事が伝わった。

そして列車は7月28日か29日頃、東京へさしかかった。途中、横浜、川崎、品川を通るとき、東京大空襲の跡は明らかになってきた。東海道線は途中止まりながらも上野駅に到着した。軍用列車は、東北方面への操車の都合で小休止となった。

私は、戦友だけに告げて、上野駅を抜け出し、当時の都電の線路沿いに池之端、団子坂を経て駒込動坂まで徒歩でたどりついた。都立駒込病院だけは焼け残っていたが、あたりは全面が焼け跡だった。ポツポツと残っているのは防火用水桶と、焼けトタンを覆った防空壕だった。

人影はまばらで尋ね当てた叔父の家跡は防火用ポンプ置き場だけ残っていた。叔父は不在だったが、留守を守っていた従姉が「叔父さんは元気だ。叔母さんや子供たちは、福島に疎開している。劇団文化座は佐佐木隆・鈴木光枝とともに全員が満州公演に出発した。」とのことであった。

動坂の家が焼けた時は、「月待おじさん、隆おじさんも近所の小学校が焼けるというので、その消火に一所懸命になっていた。その時すでに隆おじさんの下宿が先に焼け、石渉家も焼け落ちた。おばさんが大事にしていた電気治療機だけは持ちだそうとしたが、焼夷弾の火勢が激しいので、みんなでおじさんを留めた。」

当時の空襲のすさまじさが思いやられた。時間がないので、握り飯をもらい、また上野駅まで歩いて帰り、仙台行きの軍用列車にようやく間に合った。

米軍の空襲は、始めのうち軍需工場などの爆撃だったが、そのあとは、非戦闘員である民衆の住宅を焼き尽くし、平凡な人々を火焰に巻き込んで、断末魔の苦しみに追い込んだ。

老人や病人、女性や子どものいる東京という無防備都市を最も凄惨な戦場としたのである。

近年の世界各地での紛争や戦闘でのアメリカ・ロシア・イスラエルなどによる

「空爆」というニュースを見聞きするたびに、このときことを思い出す。

(松山空襲と仙台空襲は次号に掲載)

<参考資料>

●朝日歴史写真ライブラリー『戦争と庶民』(3) 空襲・ヒロシマ・敗戦
朝日新聞社 1995
(農文協図書館で貸し出し可)

●早乙女勝元 編著『写真版・東京大空襲の記録』新潮文庫 1987
http://books.yahoo.co.jp/book_detail/04752143
<http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/ASIN/4101475040/>

●誠之尋常小学校 昭和十五年卒同期会誌・古希記念号『いちご会誌』

●松山大学法文学部田村讓教授のホームページ
<http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~tamura/>

から、

●B-29
<http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~tamura/b-29.htm>

●東京大空襲
<http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~tamura/tokyoudaikuusyuu.htm>

●焼夷弾
<http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~tamura/hatukusyu-asa.htm#syoudann>

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田 勉

<http://nazuna.com/tom/>

リンク挿入：原田太郎

<農文協図書目録2005(全集出版案内 付)無料進呈>

最新図書目録—全集・百科・絵本・シリーズ・単行本など網羅したもの。

A5判・240ページのものです。

入手ご希望の方は、以下の要領でお申込みください。

農文協図書館でも新規来館者の7割がお持ち帰りになります。

件名を【農文協図書目録05・全集案内付 送付希望】とし、
郵便番号・住所・お名前・電話番号・メールアドレスをお知らせ下さい。

宛先：田舎の本屋さん

<mailto:shop@mail.ruralnet.or.jp>

「出版ダイジェスト」農文協の全集特集も合わせてお届けします。

提供：農文協直営、インターネット書店・田舎の本屋さん

<http://shop.ruralnet.or.jp/>

◆個人情報の管理について

情報の管理は東京都港区赤坂 7-6-1

(社)農山漁村文化協会で一元的に行なっております。

この情報は商品の発送、ご請求、サービス向上のために利用するもので
原則として第三者に開示することはありません。

●「一般に流通していない農業書リスト」2005も贈呈中です。

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/sp/2005/05/news2.html>

<編集部からお知らせ> 『電子耕』まぐまぐバックナンバーのご紹介

読者のみなさん、いつもご愛読ありがとうございます。

電子耕、まぐまぐバックナンバーのご紹介です。

従来、バックナンバーページの紹介は、

@niftyによるMacky!版

<http://macky.nifty.com/cgi-bin/bndisp.cgi?M-ID=1283>

のものをお伝えしてきました。(7/4現在アクセス可能)

文中リンクがクリックできて便利だったからです。

ですが、@nifty のメルマガ発行撤退にともない、7/1 に Macky! は終了し、読者・バックナンバーともサイバーエージェント社の「RanSta」に引き継がれました。

『RanSta』(ランスタ)

<http://ransta.jp/>

「RanSta」のバックナンバーは Macky! 版と同じ物になる予定ですが、このほど Macky! 版に欠号があることが判明しました。

全部は調べられてないのですが、NHK 教育 TV でも紹介された自殺問題特集 3 号 (1999.7.15 (木) 発行) が残っていません。理由は不明です。

そこで、これからは、あらたにリニューアルによって、リンクがクリックできるようになった、まぐまぐ版バックナンバーを、ご紹介していこうと思います。

まぐまぐ版「電子耕」バックナンバー

<http://backno.mag2.com/reader/Back?id=0000014872>

ちなみに 3 号は、

<http://blog.mag2.com/m/log/0000014872/15115013?page=9#15115013>

です。

一応「マガジン内検索」でキーワード検索は出来ますが、結果が 10 号分まとめて表示されますので、複数のキーワードを空白で区切ったの絞り込み検索をお勧めします。

ページが最近流行のブログの形態をとっているようなので、今後も仕様は随時進化していくのではないかと思います。その際は随時お知らせしていきます。

なお、どの発行スタンドを使用しても「電子耕」本誌の内容は同じです。

まぐまぐ版「電子耕」紹介・登録・解除用ページ

<http://www.mag2.com/m/0000014872.html>

『RanSta』版「電子耕」紹介・登録・解除用ページ

http://www.ransta.jp/backnumber_1100/

電子耕編集部

mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp

<編集後記> 両手をあげるということ

父の書棚にあった先の大戦を取り上げた本に、子どもの頃、手をのぼしたことを思い出す。原田勉さんが取り上げている「バンザイ・クリフ」も載っていたはずだが、突撃し玉砕した兵士の死体の山、自決した人々の死体の山はよく覚えている。

それにしても、万歳ではなく、降伏の意思表示として両手を上げることがなぜできなかったのか。

渡辺京二氏の著作のどこかに、‘世界は弱肉強食である。ゆえにルールをつくり守らなくてはならない、としたのが西洋で、ゆえにルールを無視してもよい、としたのが戦前の日本であった’との記述があったと記憶している。降伏し捕虜になった人間は人道的に扱わなくてはならないことは、当時すでに国際的なルール（ジュネーブ条約など）であった。そのような国際的なルールがまともに伝えられなかったことも、「バンザイ・クリフ」の悲劇にもつながっているのだと思う。

ところで今日の日本では、年間3万人もの人が自ら命を絶っている。その多くは経済的な困難が理由である。経済的弱者を保護するルールが不十分であるのが最大の原因なのだろうが、そのような人々が、両手を上げることを恥とを感じるような雰囲気もあるのではないか。そう考えると、「バンザイ・クリフ」は遠い過去の話ではないようにも思えてくる。

2005年7月6日

山崎農研会員・田口 均

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言い

たいことを具体的に。

2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。

3、1回1テーマ、10行位に。

4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。

5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

◎投稿アドレス変更のお知らせ

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、

y.noken@taiyo-c.co.jp

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

次回 163 号の締め切りは 7 月 16 日、発行は 7 月 21 日の予定です。

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

書名：岩波アクティブ新書 45 『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：735 円 発行日：2002 年 10 月 4 日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html

<本誌記事の無断転載を禁じます>

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 162 号

バックナンバー・購読申し込み／解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html

2005.07.07（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

***** ここまで『電子耕』 *****

.